Osaka Shoin Women's University Repository

芭蕉の五月雨の句に関する考察

竹島智子

はじめに

五月雨については『山の井』に

さみだれはおのへの寺も水に近き樓台となり、みやこの宮室も海中の龍宮城かとあやしまれ、庭の松も見る見る沖の藻にまがひ、井のうちの蛙も大海をしり、しょろ〳〵川も大井川をあざむき、銀浪も地にうつすやうに、雲の波も軒をひたすかと思ふ心ばへ、はれまもあらずふりつづくていなどいひなす。

とあり、梅雨に同じで、陰暦五月に降る雨なので五月雨という。

本小論では、西行の五月雨の歌や貞門及び談林俳諧における五月雨の句について考察した上で、芭蕉の発句の内、雨の句の中でも三割近く見られる五月雨の句について考察し、蕉風俳諧の本質を探りたい。

一、『山家集』における五月雨の歌

芭蕉が敬慕してやまなかった西行は、五月雨をいかにとらえたのか、『山家集』によって調査する。『山家集』の雨の歌は、次表のとおりで、（　）印は五月雨の歌である。（新潮日本古典集成『山家集』を底本とする。）

部立別	歌番号	合計
春	20・45・53・101・102・141	六首
夏	(198)・(207)〜(229)の二十三首	二十四首
秋	301・479	二首
冬	491・492・496・501・502・503	六首
恋	589・605・669・670・704	五首
雑	788・797・798・829・830・1063・1170・(1258)・1439・1440・1460・1468	十二首

Osaka Shoin Women's University Repository

雨の歌55首中、五月雨は26首占め、47%の高率で、半数近く占めていることが注目される。五月雨の歌26首中、第一句に「五月雨」と見えるのは、198・208・209・213・214・215・222・223・224・226・227・1468の十二首、第五句に「五月雨の頃」とあるのは、207・210・211・212・216・217・218・219・220・225・228の十一首、他は221が第三句に「さみだれて」、229が第四句に「五月の雨に」、1258が第二句に「その五月雨の」とある。従って、表現上、第一句に「五月雨」と詠むか、第五句に「五月雨の頃」と結ぶかのいずれかが大多数を占めていることがわかる。また、215～229は、「或る所に、五月雨の歌十五首よみ侍りしに、人に代りて」と詞書があり、代詠歌であることがわかる。

次に、代詠歌十五首を除いて、

Ⓐ第一句に「五月雨」を詠んだ歌

Ⓑ第五句に「五月雨の頃」を詠んだ歌

Ⓒその他の歌

に分類して、作品を示す。

Ⓐ 198 五月雨の晴れ間も見えぬ雲路より山ほととぎす鳴きて過ぐなり

208 五月雨に水まさるらしうち橋や蜘蛛手にかかる波の白糸

209 五月雨はいはせく沼の水深みわけし石間の通ひどもなし

213 五月雨に小田の早苗やいかならん畔の泥土あらひこされて

214 五月雨の頃にしなれば荒小田に人もまかせぬ水たたひけり

1468 五月雨の晴れ間たづねてほととぎす雲ゐに伝ふ声聞ゆなり

208では第四、五句の表現が独得で、1468の「五月雨の晴れ間たづねて」というとらえ方もおもしろいが、叙景的発想が大部分を占めているといえよう。

Ⓑ 207 水たたふ岩間の真菰刈りかねてむなでに過ぐる五月雨の頃

210 小笹しくふるさと小野の道のあとをまた沢になす五月雨の頃

211 つくづくと軒の雫をながめつつ日をのみ暮らす五月雨の頃

212 東屋の小萱が軒の糸水に玉ぬきかくる五月雨の頃

これらは、外界を眺めて所在なくすごしている様子がうかがえる歌である。

Ⓒ 1258 いかにせんその五月雨の名残りよりやがてをやまぬ袖のしづくを

この歌は五月雨から袖にかかる涙の雫をひき出し、恋心をつたえている。

西行の歌は、いずれも清明な表現の中に深い味わいをたたえている。そのことは、

昔、上人の言はれしは、和歌つねに心澄む故に悪念なくて、後世を思ふもその心進むと言はれき。此の事まことなり。

（『西行上人談抄』）

と、弟子の蓮阿の伝える歌と宗教との融合を志向した西行にして生まれる歌境であったと考えられる。

芭蕉も、このように奥深い境地を内蔵する西行歌に心ひかれ、

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは一なり。

（『笈の小文』）

Osaka Shoin Women's University Repository

としるしたのであろう。

二、貞門俳諧における五月雨の句

『はなひ草』や『増山井』に四季之詞として五月雨を入れているが、貞門俳諧において五月雨がどのようにとらえられているか、古典俳文学大系『貞門俳諧集』の発句作品を調査する。

「五月雨」を詠んだ発句は、『犬子集』に9句、『塵塚俳諧集』に1句、『新増犬筑波集』に2句、『正章千句』に1句、『時勢粧』に2句、『続山井』に21句で、合計36句見えている。次に、作品数の多い『犬子集』と『続山井』から選び、便宜上、通し番号を付けて示す。

。『犬子集』より

1　五月雨は大海知(しる)や井の蛙　　貞徳
2　五月雨や山鳥の尾のしだら天　　慶友
3　五月雨は菖蒲刀の砥水哉　　親重
4　五月雨や海竹となす小篠原　　良徳
5　仏壇の上もる雨やさあみだれ　　重頼

。『続山井』より

6　五月雨はどこもかも川の流れ哉　　退歩
7　五月雨に淀ひく牛や水車　　徳懐
8　松山も波やこしたけ五月雨　　友静
9　五月雨に御物遠や月の貌(かほ)　　宗房
10　五月雨に波のうね作る畠哉　　巷瓢

いずれの句も俳諧らしい滑稽味は感じられるが、9の芭蕉の句も特に傑出しているというほどのことはない。つまり、貞門俳諧においては、芭蕉も、他の人々と同程度の句境にあったと考えてよいであろう。ただ、芭蕉の句は、人麻呂の歌をふまえた2や、「仏壇」から「あみだ」を連想した5や、「牛車」ならぬ「水車」というとらえ方をした7や、「波のうね」というとらえ方をした10などの句に比し、言語遊戯的色彩に乏しい真面目さがうかがえる点が注目される。

三、談林俳諧における五月雨の句

古典俳文学大系『談林俳諧集』によって、「五月雨」の発句作品数を調査すると、『ゆめみ草』に16句、『境海草』に7句、『続境海草』に9句、『誹諧当世男』に1句、『俳諧江戸蛇之鮓』に1句、『誹諧東日記』に2句、『談林功用群鑑』に4句、『誹諧坂東太郎』に11句で、合計51句見えている。

その内、芭蕉の句は、

五月雨に鶴の足みじかくなれり　（『誹諧東日記』）

である。次に、10句以上「五月雨」の句を収録している『ゆめみ草』と『誹諧坂東太郎』から選んで、便宜上通し番号を付けて通覧する。

。『ゆめみ草』より

1　雨おちや滝壺となる五月雨　　有直
2　五月雨は底のぬけしか天の河　　望一

Osaka Shoin Women's University Repository

3　五月雨は関東迄も西の海　悦春
4　五月雨に牛の引もや水車　一武
5　五月雨にせかいや水の器　厚成

。「誹諧坂東太郎」より

6　五月雨軒に茶がらの山出来たり　調和
7　灰ふきや下水つかへて五月雨　山夕
8　五月雨や思はぬ川瀬桐油舟　沾葉
9　五月雨や筏組行日がらかさ　丸露
10　矢取丁稚声のやすめや五月雨　調泉

この内、4は貞門の7と似通った句であるが、その他は、いずれも貞門俳諧以上に奔放な詠みぶりとなっており、談林俳諧の特色を如実に示している。前掲の芭蕉句「五月雨に」は、滑稽味があるものの、他の句に比し、奔放とまではいかないように思われる。貞門俳諧同様、ここでも芭蕉の真面目さが見られる。

次に、芭蕉が「五月雨」を詠んだ句について考察する。

四、年号別による芭蕉の雨の句

（　）印は五月雨の句である。新潮日本古典集成『芭蕉句集』を底本とする。

年号	年と句番号	合計
寛文	六年―(7)・8	四句
	九年―35	
	十年―(37)	
延宝	五年―(76)・86	五句
	六年―99	
	八年―(115)・122	
天和	元年―(143)・148	三句
	年未詳―182	
貞享	元年―192・219・222	八句
	四年―297・(300)・(301)・(302)・335	
元禄	元年―372・390・(415)	三十一句
	二年―(508)・(516)・(523)・534・550	
	564・572・594・595・596・602	
	三年―611・634	
	四年―685・(703)・734・744・745・750	
	五年―770・776	
	七年―848・852・859・(861)・(864)・903・913	
貞享～元禄	962・968・972	三句

Osaka Shoin Women's University Repository

五、季節別による芭蕉の雨の句

（（　）印は五月雨の句である。）

季節	句番号	合計
春	962・297・372・390・611・685・848・852	八句
夏	(7)・8・(37)・(76)・(115)・(143)・(182)・(300)・(301)・(302)・(415)・(508)・(516)・(523)・534・634・703・859・861・864・968	二十一句
秋	770・35・903・99・913・148・192・550・564・572	十句
冬	86・696・602・122・734・219・744・222・745・335・750・594・776・595・972	十五句

以上、五月雨の句は、雨の句54句中、15句見られ、28%を占めている。既に記載した西行と比較すると、芭蕉は五月雨の占める比率が少ないことがわかる。そのことは、芭蕉に比し、西行がより強く雨の中でも五月雨に心ひかれて詠んだものと思われる。

年次別では、五月雨の句が2句以上見える年は、貞享四年と元禄二年に各3句、次いで元禄七年に2句である。寛文六、十年、延宝五、八年、天和元年、元禄元、四年は各1句見られる。

六、芭蕉の五月雨の句について

次に、五月雨の句を年次順に配列して考察したい。

(1) 寛文年間

(7) 五月雨に御物遠や月の顔

(37) 五月雨も瀬踏み尋ねぬ見馴河

(7)では、挨拶句を用いて、月を擬人的に扱った滑稽味がある。(37)では、「見馴河」から発想した観念遊戯の作である。俳諧においては、滑稽は大切な要素ではあるが、これらは、未だ滑稽の段階以上には出ていない初心の句であるといえよう。

(2) 延宝年間

(76) 五月雨や龍燈あぐる番太郎

(115) 五月の雨岩檜葉の緑いつまでぞ

(76)では、番太郎が番小屋に提灯を掲げる様子を龍燈に見立てた寓言の句である。(115)では、長雨を恨む心と岩檜葉の緑の持続を期待する心との矛盾にじれる心が見られる。これらを比較した時、延宝五年作の(76)と延宝八年作の(115)には、内面的に差違が見られる。つまり、(115)に至ってはじめて自らの内面を見つめる心が見えるのである。この間の延宝六、七年頃は、芭蕉にとって内面的に転機があったと見なければなるまい。そこで、年譜[注1]によって主な出来事を見ると、「延宝六年春もしくは前年春立机披露の万句興行を催す。」

Osaka Shoin Women's University Repository

とあるのが最大のもので、俳諧宗匠として自覚的な第一歩を踏み出しており、そのことが、作品にも投影したものと見られる。

(3) 天和年間

(143) 五月雨に鶴の足短くなれり

この句は、自然を良しとする『荘子』をふまえ、鶴が自然法則にそむいたとする滑稽味がある。五・五・七の破調句をとって、漢詩文に心ひかれた当時の反映がみられる。

(4) 貞享年間

(300) 五月雨や桶の輪切るる夜の声

貧主自らを言ふ

(301) 髪生えて容顔青し五月雨

(302) 五月雨に鳰の浮巣を見にゆかむ

(300)では、桶の木が水びたしで膨脹して竹の輪が切れるという内容で、雨夜の寂寥感が漂っている。(301)では、芭蕉自身の自画像を投影させ、(302)では、『三冊子』に見えるように、芭蕉自ら浮巣を見に行くという酔狂・風狂の心自体に俳諧性を持たせている。

天和年間の(143)は、前表のとおり、天和元年作であり、(300)・(301)・(302)は、いずれも貞享四年作である。天和元年より貞享四年に至る俳諧の進展は大きいと言わねばなるまい。つまり、貞享四年の作には、以前には見られなかった寂寥感[注2]、自画像、風狂といった俳諧の深化が顕著に見られるのである。

そこで、この数年間、芭蕉身辺での主な出来事を年譜によって見ると、天和二年には、北村季吟の序文を得た『武蔵曲』を出版し、ここで初めて「芭蕉」号を用いている。さらに、天和三年には母と死別した。(すでに明暦二年に父とは死別している。)貞享四年末には、故郷伊賀へ帰り、

ふるさとや臍の緒に泣年の暮

と詠んで、親の慈愛に泣いている。貞享元年には、

野ざらしを心に風のしむ身かな

という悲愴な覚悟で、野ざらし紀行の旅に出発し、紀行の第一歩を踏み出したのである。

この間の芭蕉書簡[注3]を見ると、

先づハ久々爰元俳諧をも御聞き不レ被レ成、其上京・大坂・江戸共ニ俳諧殊之外古ク成候而、皆同じ事のミニなり候折ふし、(下略)(天和二年五月十五日付　高山伝右衛門宛)

とあり、当時流行の古風を排除し、新風を創造すべきであることを示している。また、

唯李・杜・定家・西行等の御作等、御手本と御意得可レ被レ成候。(貞享二年正月二十八日付　山岸半残宛)

と言い、天和以来流行の漢詩文調を拒否していることが注目される。つまり、この数年間、芭蕉は、漢詩文調を拒否し、新風樹立をめざしており、旅によってその新境地を開拓しようとしたのであろう。そのことが、作品にも反映して、深まりを見せるようになったと思われる。

Osaka Shoin Women's University Repository

(5)　元禄年間

(415)　五月雨に隠れぬものや瀬田の橋
(508)　五月雨は滝降り埋むみかさ哉
(516)　五月雨の降り残してや光堂
(523)　五月雨をあつめて早し最上川
(703)　五月雨や色紙へぎたる壁の跡
(861)　五月雨や蚕煩ふ桑の畑
(864)　五月雨の空吹き落せ大井川

この内、(516)と(523)は、奥の細道に見えるが、奥の細道原稿の完成は、元禄六年末（井本農一氏『芭蕉の文学の研究』による。）または、元禄六年冬か七年春（尾形仂氏『日本の古典　奥の細道』による。）と推定される。（井本氏は、前掲書において、「奥の細道」執筆過程で、十五句以上の発句を、紀行のために制作したことも指摘されている。）また、(703)・(861)・(864)は、芭蕉が「軽みをしたり」（三冊子）と言った元禄三年以降、晩年の作である。(703)では「色紙へぎたり」とあり、大量の雨であったことがわかる。

ところで、(415)の水墨画風の作品や(508)の実感をとらえた作品、(516)の歴史的な回顧詠嘆を基調とした光堂礼賛など率直にとらえた作品の中にあって注目されるのは、(523)の量感と速度感あふれる作品と、(864)の力感をとらえた作品とは、いかにも類似していることである。(523)の奥の細道原稿完成が、前記のように、元禄六年末か七年春頃と推定されるから、元禄七年作の(864)に近い豪快な句である。(523)の初案「涼し」は、傍観者の立場で書いており、季感を失ってしまう。

奥の細道の旅に同行した曽良の[注4]随行日記は、元禄二年三月二十七日より九月六日迄を収録しているが、降雨は五月雨の季も含んでいる為、六十一日に及んでいる。三月は下旬から出発したので一日、四、五、六月は各十四日、七、八月は各九日の降雨で、夏季に多いことがわかる。その内、雷雨または強雨は、四月二、十一、二十四日、五月二、十四、十六日、六月十五、十六、二十六、二十八日、七月朔、四、七、二十六日の十四日間である。

未ノ上剋ヨリ雷雨甚強。漸ク玉入へ着。　（四月二日）
雨強ク甚濡。　（六月十六日）

など、芭蕉も苦労して旅行している様子がうかがえる。「奥の細道」という秀れた紀行文は、このようなさまざまの苦難を経た成果であったと思うと、感慨深い。同時に、芭蕉にとっては、これらの苦難を超えて旅を続けることは、無上の喜びでもあったと思われる。

(703)は、元禄四年「嵯峨日記」に見えるもので、(861)は元禄七年作であるが、(703)のわびしさと(861)の陰うつさ（この病蚕は、衰弱してきた芭蕉自身の投影でもあろう。）とは、(861)の方が、より重みを持っているものの共通性を持っており、元禄六年七月の閉関前後で、閉関と係わりを持っているように思われる。

「嵯峨日記」には、

獨住（ひとりすむ）ほどおもしろきはなし。長嘯隠士の日、「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」と。（卯月二十二日）

Osaka Shoin Women's University Repository

人不来、終日得閑。　（卯月二十七日）

とあり、木下長嘯子[注5]の『挙白集』に見える語句に学んで、独居のおもしろさ、自ら閑を得ることの喜びをしるしている。

「閉関之説」では、

南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ、老の楽とは云べけれ。人来れば無用の辨有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには。友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫白書、自禁戒

となす。

とあり、ここでも閑になることが老いの楽しみであるとし、杜五郎云々については、木下長嘯子[注4]「うなゐ松」にも見える語句をふまえて、友なきを友とする境地を示している。

閉関については、

羅生夏中甚暑ニ痛候而、頃日まで絶二諸縁一、初秋より閉関、病閑保養にかゝづらひ筆をもとらず候故心外に打過ぎ申候。

（元禄六年十一月八日付　荊口宛）

とあるように、猛暑の為、五十歳という老齢に加えていっそう体調が衰え、療養を兼ねて初秋に閑を求めたことは申すまでもない。

おわりに

以上、貞門俳諧では、同時代の俳人に比し、さほど傑出しているとは思われなかった芭蕉も、天和より貞享に至る俳諧の進展は大きく、苦難を経た旅を契機として深められていったことは興味深い。

（注）

1、尾形仂・編『芭蕉必携』（学燈社）による。
2、村松友次氏は、天和二年及び三年の作品を比較して、「人生の寂寥処ということばがあるが、天和三年に至って、芭蕉はついにそこに至っているという感じがする。」（『芭蕉の手紙』）としるされている。
3、日本古典文学大系『芭蕉文集』を底本とする。
4、旺文社文庫『奥の細道』所収「曽良随行日記」を底本とする。
5、村松友次氏は、「芭蕉の文章に最も大きな影響を与えているものは木下長嘯子の『挙白集』である。」（『芭蕉の作品と伝記の研究』及び『芭蕉の手紙』）と指摘されている。